



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〔第四十六号〕

立冬 りっとう 十一月七日



神宮ばら園

道の辺の うまら 荊の末に うれ はほ豆の
からまる君を 離れか行かん 『万葉集巻二十』

道端に生い茂っているウマラに絡みつく、つる豆のように、私に絡みつく君と離れて行かねばならないという防人の心情を詠んだ歌です。このウマラというのが実はバラの花。野に自生するノバラを指しますが、ヨーロッパの花のイメージが強いバラが実は万葉集にも歌われるほど、身近であったのです。

内宮前でも神宮会館の神宮ばら園公開を楽しみにしている人は多いでしょう。私もその一人、いつもなら十月中頃が見ごろなのですが、今年は遅く十月も末になって咲き揃いました。百二十種、四百五十株もの花は香りを放ち、心を浮き立たせます。以前ここで聞かれた句会では、「バラに付けられた立派な名前」や、「夜のばら園」など、さまざまな視点で詠まれた句が並びました。

神宮ばら園が出来たのは昭和六十二年（一九八七）、当時の三重県ばら会会長からのバラ苗の献納がきっかけでした。園内のバラの多くは開園当初に植えられたものといえますから、もう二十年。伊勢神宮の式年遷宮と同じ歳月が経っているのです。ばら園では四季咲きの木の負担を少なくするため、五月と十月だけ開花させ、あとは蕾を摘み取っています。

暦の上では冬ですが、まだ秋真つ盛り。けれど、公開の終わったばら園では、堆肥などの土作りと草の発生を抑え表土の乾燥を防ぐためのワラ敷きが始まります。来る冬に向けての支度を私たちもそろそろ始める時期です。

文 千種清美